

NEANET創立20周年記念誌

より良い隣国関係構築に向けて

- 今までの北東アジア交流の振り返りと将来を考える -

2023年11月28日

特定非営利活動法人 北東アジア輸送回廊ネットワーク

目次

巻頭言	
北東アジアの中の NEANET (花田 磨公)	1
基調論文	
北東アジアの地域協力の歩みと輸送回廊 —NEANET 設立 20 年を前に— (新井 洋史)	12
総論	
ポストコロナ、ポストウクライナ戦の北東アジア物流新戦略 (岩間 正春)	22
北東アジアにおける国際海上コンテナ輸送ネットワーク (笹山 博)	30
日本海側港湾における北東アジアとのネットワークに関する考察 (小玉 朋志) ..	38
北東アジア観光交流の実践 —北東アジア国際観光フォーラム (IFNAT) の歴史— (鈴木 伸作)	46
北東アジア圏の観光交流—現況と展望— (鈴木 勝/千原 嗣郎/崎本 武志) ..	55
北東アジアクルーズおよび港湾の活用による 高付加価値化観光事業推進に関する一考察 (崎本 武志)	64
各論	
史上初の日韓中ロ 4 か国共同出資 「日本海横断国際フェリー航路プロジェクト」の軌跡 (簡略集) (三橋 郁雄) ..	74
対岸と秋田の交流を振り返って 冷え切った現状を変革する糧としての備忘録 (西宮 公平)	83
広域連携と港の共生—金沢港の実体験から— (西盛 祐吉郎)	91
北東アジア諸国との貿易の拡大に向けた舞鶴港の取り組み (新宮 敦雄)	100
観光講義を通して見た“ロシアの観光ビジネス&ホスピタリティの変化” —サンクト・ペテルブルグ市からカムチャッカ半島まで— (鈴木 勝)	109
モンゴル南ゴビの資源開発とインフラ事業 —電力インフラ事業の構築を中心として— (本間 邦興)	118
北東アジアの安寧と図們江 (谷 秀洋)	126
00A 研究会成果：日本からみた中国の「一帯一路」政策 中国「一帯一路」構想への対応 (田中 弘)	136
北東アジアの中の NEANET (辻 久子)	140
NEANET の歩み (年表)	145
執筆者紹介	150

注)

私の論文 (P.109 以降) は、カラーを反映するため、また、文献引用の便宜のため

に「原稿」を使用しております。したがって、完成段階では、

多少の修正があります。

観光講義を通して見た“ロシアの観光ビジネス&ホスピタリティの変化”

—サンクト・ペテルブルグ市から、カムチャッカ半島まで—

鈴木 勝

[要約] コロナ禍前の約10年間、ロシアで「国際観光実践講義」を、西はサンクト・ペテルブルグから東のペドロパブロスク・カムチャッキーまで合計14都市で行った。開催の目的の1つは隣国ながらも異常に少ない日露交流の活性化だ。勿論、主眼は四島返還の領土問題で有利な環境を作ることが狙いである。講義を通して見たロシア流観光ビジネス&ホスピタリティの変化を追った。各所での開催の努力も手伝い、年々交流が盛んになり将来に大いなる期待が持たれたが、ロシアのウクライナ侵攻で日露交流は厳しい局面に至った。

[キーワード] ロシア日本センター、日露経済協力プラン8項目、観光ホスピタリティ

1. はじめに 大学教員への転身前、33年間旅行会社に勤務し、世界中多くの国々を巡ったが、なぜかロシアには全く渡航チャンスがなかった。しかし、ある期を境にロシア&ロシア人との接触が増えた。日露交流が動き始めた頃、2010年少し前～コロナ禍直前2019年まで、ほとんど毎年、ロシアを訪問し講義したり、日露国際会議で発表したり、または、来日ロシア人観光専門家の研修講師を引き受けたりした¹。その結果、訪問都市はサンクト・ペテルブルグからスタートし、モスクワ、サラトフ、オレンブルグ、アルハンゲルスク、ニジニノヴゴロド、ゴルノアルタイスク、イルクーツク、ウラン・ウデ、ヤクーツク、ハバロフスク、ウラジオストク、ユジノサハリンスク、ペドロパブロスク・カムチャッキーなど合計14の都市に上り(図表1)、中でも観光振興に力を入れるサンクト・ペテルブルグ、モスクワ、ウラジオストクは回を重ね、延べ20都市を超えることとなった。

(図表1)



2007年冬に、ロシア日本センター²主催の講義でロシアへ行くことになった。「近時、日系企業の対露進出拡大でモスクワやサンクト・ペテルブルグ等へのビジネス・観光客も増大傾向にある。また、各地域に、世界中から特に日本人観光客をどう誘致したらよいか、誘致手法や受入れ体制の整備のためにはどうしたらよいか」などの手ほどきの講義依頼であった。開始は、2年続けて観光都市サンクト・ペテルブルグでの3日間の講義であったが、大体各地1日の割合で5~6時間である。ただ、観光の盛り上がりを見せるウラジオストクやサハリンでは2日間も実施した。参加者は地域により異なるが30~60人で、観光従事者を中心にして、地元の大学生が加わった。

ある時、外務省（在ロシア日本国大使館）勤務経験のある井手康仁氏の「日露人的交流」論文³を読んで驚いた。筆者の観光実践講義が記載されている。「プーチン大統領訪日（2005年11月）に際して、『観光分野における日本国政府とロシア連邦政府との間の協力の強化に関するプログラム』が署名されたことを受けて、2005年11月には第1回目の日露観光交流促進協議会が東京で開催された。この席上、日本側が、日本の旅行関連法について、ロシアの観光関連産業従事者の理解を促進するためのセミナーを開催することのほか、ロシアに6カ所ある日本センターを通じて、ロシアの観光業の人材育成のための協力を行うことで合意した。こうした流れを受けて2006年にはモスクワで第2回目の日露観光交流促進協議会が開催されたほか、サンクト・ペテルブルグ日本センター主催で観光セミナーが開催され、日本から講師を招き現地旅行関係らに日本人観光客を増やすにはどうすればよいか等について説明した」。プーチン大統領の署名プログラムに沿い、10年以上、各地のロシア日本センターの依頼で延べ20都市以上を巡ることになった。

さて、時事通信（図表2）によれば、「日ロ経済協力、過去最大規模＝官民80件で3000億円－政治主導で進出加速。日本とロシアは16日、安倍晋三首相とプーチン大統領の首脳会談を踏まえ、エネルギーや医療・保健、極東開発など8項目の経済・民生協力プランに基づき、官民で80件の合意文書を交わした」。これは「経済協力を先行させ、領土問題で譲歩を引き出す環境を整備するのが狙い」であった。ロシアの6カ所ある日本センターから「No.8 人的交流」の講義依頼がさらに増えた⁴。

1	医療	疾病予防などでの政府間協力 日ロ企業間の出資・技術提携
2	都市環境	ロシアの都市環境整備 東シベリアでの廃棄物処理支援
3	中小企業	ロシアへの中小企業進出支援
4	エネルギー	サハリン沖での日ロの資源探査・開発 サハリン沖の天然ガス・石油生産増強
5	生産性向上	国際協力銀行などによるロシア企業向け融資 日本の工作機械メーカーによる長期投資合意
6	極東開発	日ロ合併による温室野菜栽培事業 リハビリテーション病院の建設
7	先端技術	郵便システムの効率化支援 携帯電話・情報通信技術協力
8	人的交流	日ロの大学間協力 日ロ両政府がそれぞれ査証(ビザ)発給要件を緩和

(図表2)時事通信 2016/12/16

2. ロシアでの観光実践講義（図表3）の内容

2-1. 観光講義の目標・内容、観光関係者の職種

「目標」：1)「観光業のプロとして、国際観光をいかに活発にさせるか」の手法の習得

（例：官民一体による共同連携プロモーションの手法。外国の旅行会社へのアプローチ手法、観光産業連携システムの構築、観光面における人材育成の手法など）

2) 外国人ツアー（特に、日本人対象）に関する全般的知識の習得（例：ツアーの構造・企画手法・オペレーション手法・販売手法・消費者動向など）

3) 外国人受入れ体制の構築手法の習得（ハード面）—旅行者に歓迎される諸施設・設備（例：ホテル、空港、航空機、レストラン、土産品店など）

4) 外国人受入体制の構築手法の習得（ソフト面）—例：ホスピタリティあるシステム

ところで、日本政府の外国人誘致キャンペーンが2003年にスタートし、世界から外国人が多くなっている。しかし、講義開始当時は日本の受入態勢はなお未熟で、日本もロシア同様に、“観光発展途上国”、または“観光後進国”と言えた⁵。したがって、ロシア人との接触の中で、“観光立国ニッポン”のためのヒントを種々見つけることができた。

(図表3) 「ロシア各地における観光講座風景」



2016年10-11月「極東ロシア」観光振興講義
 (産官学・観光プロ+サハリン州立大学学生・・・単位付与形式)

Seminar "Tourism from A to B - Japanese Experience for Development of Sakhalin Tourism"
 Oct.31 - Nov.01 at SakhGU

10月30日(日)	羽田⇒札幌⇒ユジノサハリンスク
10月31日(月)	サハリン (講座)
11月01日(火)	同上
11月02日(水)	ユジノサハリンスク⇒ウラジオストク
11月03日(木)	ウラジオストク (講座)
11月04日(金)	同上
11月05日(土)	ウラジオストク⇒成田



「参加職種・講座スタイル」: 初のセミナーはサンクト・ペテルブルグで50人ほどの観光関係者を対象とした。驚きは参加者の幅広い職種。旅行会社、ホテル、バス会社、観光ガイド・通訳。警察官（5名）、警備保障会社、市政府、商工会議所、IT会社、大学教授、美術館・博物館と様々だ（他地域ではクルーズ会社・港湾関係者、教会牧師なども参加）。日本での講義は、狭い範囲の観光関係者（旅行会社やホテル）で、美術館や博物館などはない。ましてや警察官や警備保障会社もない。日本での会議もロシアに見習う必要がある。また、「ワークショップ」が特徴的である。例えば、「1年を通じて観光都市となるための商品とその商品作り」をテーマ設定し討論するが、男女区別なく年配も若きも懸命である。これに比べ日本では観光専門家を招聘し聞くだけのセミナーが多い。

講義1(事前準備):ウラジオストク&カムチャッカの講義の進め方と予定である(図表4)。

- 1) 両都市では中身を一部変えて行う。ウラジオストクでは過去2回実施しているが、初めての参加者もいると思われるので基本的論議は必要である。
- 2) 両地域の特徴に着目し、徹底的に掘り下げて、観光地&観光振興手法の研究を行う。
- 3) 「インターネット販売拡大」や「両都市のクルーズ船寄港」：他地域では簡単に触れたが、ここでのビジネス拡大が考えられるので、より多くの講義&資料を提供したい。
- 4) 両都市の「海外比較」実施。例：ウラジオストクとオーストラリア・ケアンズと比較
- 5) 「国際観光で急成長の日本」：事例研究として多くの事例（成功&失敗）を挙げたい。

(図表4) [事例：観光講座内容]2018年「ウラジオストク&ペトロパブロフスク・カムチャッキー」		
1	世界的な観光活性化と観光の開発/振興の目的	世界や日本の観光交流の活性化/観光の及ぼす効果・影響（各側面：経済的・社会文化的・自然環境的）/観光形態 [国際—インバウンド&アウトバウンド—] & 国内]/ [最近の国際観光の発展理由]
2	国際観光の開発/振興のためのインフラ整備と観光関係者の推進手法と課題	1) 「観光インフラの整備」 (1) ハード・インフラの整備・ホテル・航空/空港・道路網・交通機関・ショッピング（土産店・免税店）・レストラン・観光地 (2) ソフト・インフラの整備 ・言語表示 ・ガイド/通訳 ・ホスピタリティ・マインド ・観光教育・安全・危機管理システム 2) 「観光関係者（官・産・学その他）の手法と課題」 ・「官」政府観光局・地方自治体「産」航空会社・ホテル・旅行会社 ・「学その他」大学・NPO/ボランティア etc.
3	1年を通じ観光地となるための商品作り	1) 商品が出来上がる仕組み ・パッケージ・ツアー ・団体旅行（修学旅行 etc.） ・メディアツアー（新聞・インターネット etc.）・個人旅行 2) マーケティング戦略—顧客ニーズと商品企画— ・多様性ニーズに合わせた「選択肢多様化」商品 ・旅行費用の「値ごろ感」と「二極分化現象」 ・企画・販売促進面のネットワーク構築（ロシア&日本）

4	日本マーケットへのアプローチ手法	1) 日本の旅行会社の理解 (旅行業法・収益構造・旅行代金の構造) 2) 旅行会社へのセールス法・トレードショーの活用法
5	「観光立国」の道	[事例] 観光立国ニッポンに向かって—産官学における成功&失敗—
6	まとめ	質疑応答と講義総括

講義 2 (出張予定表) : 本行程は、全出張の中で長距離移動も多く、最もハードであった。

6/22 (木)	成田出発 → モスクワ到着
6/23 (金)	SU215便 00:10モスクワ → 08:25ゴルノーアルタイス市 (アルタイ共和国)
6/24 (土)	講座 (ゴルノーアルタイス市)
6/25 (日)	SU216便 9:35 ゴルノーアルタイス市 → 10:15 モスクワ
6/26 (月)	講座 (モスクワ市内都市)
6/27 (火)	移動日 モスクワ → アルハンゲリスク
6/28 (水)	講座 (アルハンゲリスク)
6/29 (木)	移動日 アルハンゲリスク → モスクワ → ニジニー・ノヴゴロド
6/30 (金)	講座 (ニジニー・ノヴゴロド)
7/1 (土)	ニジニー・ノヴゴロド → モスクワ、モスクワ出発
7/2 (日)	成田到着

「講義雑感 (含・日露両者の意識面での相違)」

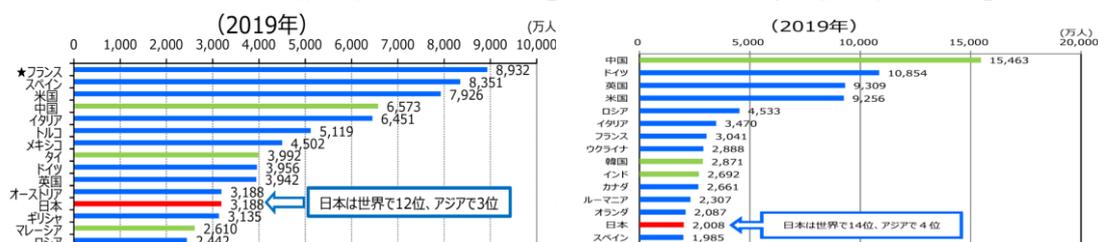
- ロシア人は初対面の講師に対し、非常に高い関心を抱く(?) ⇒ 講義開始「1、2時限目」には、講師の品定めのためだろうか (Q&A 時間を別に設定していても) 質問攻めである。根気よく丁寧に答えるうちに、講師の性格 (能力?) が理解できたのだろうか静かになる。
- 裏表のない本音をぶつけ合う性格が気持ち良いし活発である ⇒ (例) ワークショップの際: 「警察官 vs. ホテル・女性マネジャー」のやり取りである。<外国人旅行者へのビザに関して> 「(マネジャー) なぜ、もっと簡素にしないのか?」、「(警察官) テロが発生してもよいのか。テロ対策にはビザは重要なんですよ!」 (かなり活発な討論が続く)。
- 「観光ホスピタリティ」⇒ 観光従事者の“知識レベル”はかなり高い。しかし、実際は「観光ホスピタリティ」の模範との乖離が目立つ (例: モスクワ空港チェックインの長蛇の列)。
- 毎年、日本で「旅行博覧会 (ツーリズム EXPO)」が開催される (図表 5)。講義開始頃には意欲は見えなかったが、最近、「極東ロシア」ブースも登場している。<ウラジオストク会場の質問> 「我々は最近、日本で出展しているが日本人旅行者は、なぜやってこないのか!」 (これに対して、「世界の観光面での競争の激しさ」と (図表 5) ツーリズム EXPO ロシアコーナー (2014.09) 「観光プロモーションの継続性」を唱えた)。
- <受講者から> 「クリル (千島列島) のパッケージ・ツアーはいつ頃、日系旅行会社は催行するのか?」 (北方 4 島問題の意識の希薄な質問もあった一日露両国民の意識ギャップ)。
- 「日本人が行きたい海外旅行先ランキング」が JTB など毎年発表されるが、誤解しているロシア人が多い。ロシアが「BEST10~20」にランクインしている感覚だが、かなり後順位 (NO. 30 以降) である。講義の際、日本人の“ネガティブ”な対露イメージ (井手康仁 2006 も言及) などを話すが、外交官や政治家などと比較し民間交流の少なさを痛感した。



3. 観光実践講義から見た“ロシア・観光ビジネス&ホスピタリティの変化”

3-1. ロシアの国際観光 外国人旅行者受入数順位で、ロシアは2011～2015年は世界第9位だったが2019年は15位に落ちた。他方、ロシア人の海外渡航は、毎年順調な動きで2019年は世界のベスト5である（図表6：UNWTO&服部倫卓⁶）。これらは外見的な観光面であるが、実情をより知るために世界経済フォーラム（WEF）が2007年から2年毎に発表する「世界観光競争力ランキング」を紹介したい。毎回約130カ国・地域の比較で、2019年まで総合順位は60～40番で徐々に良化しているが、旅行に重要な「安心安全」や「国際的な開放度（ビザや航空など）」の指標は最後尾に近く、大改革が必要である。

（図表6）「外国人旅行者受入数・順位」（BEST15）＆「海外旅行者・順位」（BEST15）



（資料）「令和3年（2021年）版観光白書」

3-2. ロシアと日本の観光交流 日露交流には、隣国同士とは思えないほど極端に少ない状態が続く。ここ10年ほど、双方の流れの合計を見ても、年間にわずか13万人ほどだ。日本⇒ロシア（約8万人）、他方、ロシア⇒日本（約5万人）である。訪日客数は、やっと2012年以降、伸び率を高めている（図表7&8）。2017年に日露両政府により、「2019年度までに、双方の交流を25万人にしよう！」との目標が出された。

（図表7）「訪ロシア日本人数の推移」 [単位]人数：人/ 伸率：%

年	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
人数	78,188	76,204	86,806	102,408	105,220	87,280	84,631	101,827	105,251	112,286	12,822
伸率	5.4	-2.5	13.9	18.0	2.7	-17.0	-3.0	20.3	3.4	6.7	-88.6

資料：国連世界観光機関 UNWTO/JATA「数字が語る旅行業」

（図表8）「訪日ロシア人数の推移」 [単位]人数：人/ 伸率：%

年	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
人数	51,457	33,793	50,176	60,502	64,077	54,365	54,839	77,251	94,810	120,043	22,260
伸率	9.6	-34.8	48.5	20.6	5.9	-15.2	0.9	40.8	22.7	26.6	-81.4

資料：日本政府観光局（JNTO）

日本政府やJATA（日本旅行業協会）が動き出した。JNTO 日本政府観光局はロシア人観光客誘致を目指し、2016年12月にモスクワ事務所を開設した。また、JATAは“前代未聞”の「極東ロシアへ行こう！」キャンペーン（図表8）を展開させた。



（図表9）JATA キャンペーン

さらに2019年に、日露による推進策として「2023年までの共同活動プログラム—2020年～2023年にはお互いの訪問者数を、それぞれ20万人、合計40万人⁷—」を組み立てた。

3-3. ロシア流観光ビジネス&ホスピタリティの変化 講義開始時のロシア観光の問

題はこう言われていた。ロシア通日本人の指摘は「整備が遅れているホテルや観光施設、食事、観光客へのホスピタリティやサービスの欠如、飛行機内サービスや遅延、休航時の対応など⁸」であり、また、欧州業界メディア Travel Review News は手厳しい評価⁹である。

「今や、欧州を中心に誘致競争を激烈に展開中であるが、ロシアは全く“ゲームの圏外”である。特に、航空運賃の高さ、各種観光インフラの不十分さ、観光情報の不足などが問題」と指摘する。したがって、ロシア観光と言えば、モスクワやサンクト・ペテルブルグが中心で、他の地域へは極端に旅行者が減少していた。しかし、2018年に、大きく変化する「ロシア流観光ビジネス&ホスピタリティ」をある新聞¹⁰に寄稿した。「最近、ロシア観光が変貌している。特に『極東ロシア』であるが少しばかり伝えたい。官民が旅行客受入に積極的である。さらに観光インフラが整えられてきた。例えば、ウラジオストクは欧風建造物の街並みや天然の良港で有名だが、さらに磨きがかけている。お洒落なカフェやショップもあり、ロシア・グルメのレストランも多い。ロシア最高峰のバレエやオペラを楽しめるマリンスキー沿海州劇場ができた。ルースキー島に学术交流拠点の極東連邦大学があり、沿海州水族館も建ちファミリーに人気だ。軍事施設跡も観光ポイントである。欧州文化と共に、日本ゆかりの歴史や文化（例：与謝野晶子歌碑）も残り、好奇心ある日本人を楽しませる。鉄道の旅は郊外と共に長距離のシベリア鉄道も楽しめる。その他、ハバロフスク、サハリン、バイカル湖畔、カムチャッカ半島なども魅力を増しつつある」。

ところで、「官・産・学・民」が躍動する都市に「ウラジオストク¹¹」がある。官では「ウラジオストクを含むロシア沿海地方では2017年から電子ビザの無料申請が可能」となり、日本人渡航者は2018年、2019年とも急伸した。「産」ではウラジオストク港でクルーズ誘致に宣伝ビデオを作成、同時に講義は毎回、社長&社員が大勢だ。「学」は極東連邦大学教授5名以上で熱心に参加。「民」では牧師が「若い日本女性が訪問するが何故か？」と理由を尋ねつつ講義に出席した。“起業”を考えているのだろうか。（帰国後に、ウラジオストク市長から「要塞&戦跡の街への助言」と連絡があり、「Military Port CITY（戦跡都市）」でなく、「CITY of PEACE（平和都市）」を前面に出した宣伝をと専門家仲間で提言した）。

この勢いの中で、JALとANAは2020年3月から成田—ウラジオストクに毎日就航予定で、それに合わせJTBは特別パンフレット（図表10）を作成したが、コロナ禍で“幻のツアー”になった。他方、ホテルオークラウラジオストクは2021年に「ロシアで第1軒目ホテル」として開業予定であった（このような熱気のウラジオストクに、講義や国際会議でコロナ禍直前まで7回も通うことになった）。



（図表10）JTB ツアー

4. ポスト・ウクライナ侵攻のロシア観光 ロシアのウクライナ侵攻で国際観光の潮流は、“観光交流・二極分化”を辿りそうだ。1つはロシアを組み入れた流れ（中国、中央アジア、グローバルサウスなど）、他はロシアとの交流を最小限にした流れ（日欧米・自由主義国など）か。日本政府は「ロシアによるウクライナへの軍事侵攻を受け、8項目の経済協力プ

ンに關係する政府事業を当面見合わせたい」と発表し、現在、「No. 8 人的交流」を止めている。しかし、まずは、ロシアによるウクライナ侵攻を撤退させ中止させるべきである。

「補足」最後に感謝の言葉を述べたい。10年以上のロシアでの観光講義の実現は、6カ所の「ロシア日本センター」の皆様のご支援の賜物である。また、名前を掲載できないが多くの講義通訳の皆様に御礼申し上げたい。ところで、日本の海外パッケージ・ツアーだが、旅行会社の店頭では「ロシア版パンフレット」はほとんど見られない。欧州の国々の後に「ロシア」は“付け足し”である。その中で右のパンフレット（図表 11）が登場できたのも、現地ロシアの力強いサポートがあったからだと思う（筆者の生存中、この種のロシア版パンフレットの再登場が絶望的だと思うと誠にいたたまれない）。



（図表 11）2018 版
LOOK JTB パンフレット

「注」¹ 出席した国際会議としては、①「日ロ沿岸市長会議」<https://www.nichienkai.jp/>

（2009年：函館、2011年：ヤクーツク、2013年：舞鶴、2015年：ウラジオストク）、

②IFNAT（北東アジア国際観光フォーラム 2009・ハバロフスク）。日本国内講義（外務省関連：2004年・大阪&東京、2009年・東京、2012年・東京、各々ロシア人約 20名）

² 6カ所のロシア日本センター。モスクワ、サンクト・ペテルブルグ、ニジノヴゴロド、ウラジオストク、ハバロフスク、ユジノサハリンスク。詳細は「外務省（日本センター）」にて発表（https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/russia/shien/j_center.html）

³ 日本大学准教授・総合観光学会「日ロの人的交流の拡大とその阻害要因」（2006）

⁴ 後に論文で知ったのだが、旅行業仲間・小林天心氏も1度（2012年10月）モスクワ日本センターの依頼で講義を実施。その他、外務省HPではホテル業の講義も実施されている。

⁵ その頃の筆者の出版『観光後進国ニッポン、海外に学べ！』（2009NC コミュニケーションズ）

⁶ <https://globe.asahi.com/article/12397573>「ロシアが外国人観光客の受入に本気を出し始めた」（Asahi Shimbun [Globe] 2019.05.28）

⁷ https://www.mlit.go.jp/kankocho/topics03_000087.html

「観光分野における 2020 年から 2023 年までの期間の共同活動プログラム」（観光庁）

⁸ 「第1回創造的観光国際フェスティバル」（ロシア連邦報告）鈴木伸作氏 ERINA2014. NO. 121

⁹ 「RUSSIA LOOKS TO IMPROVE TOURISM INFRASTRUCTURE AND OVERPRICED TOURIST RATES」（May7, 2012）

¹⁰ 公明新聞 2018年4月28日『ロシア観光を活発に！』。また、インタビューがHPに。

（ロシア語）「極東ロシアの現状」<http://www.jp-club.ru/razvitie-turizma-na-dalnem-vostoke/>

¹¹ 紹介記事の1つ。栗田シメイ「ウラジオストク旅行に女性が熱を上げるワケ」

（東洋経済 2018/10/31）<https://toyokeizai.net/articles/-/245554>

「参考文献」井手康仁 2006『日ロの人的交流の拡大とその阻害要因』（総合観光研究 NO. 5）

小林天心 2013『新生ロシアにおけるツーリズムの現状』（亜細亜大学「紀要 NO. 4」）

鈴木勝 2015『観光立国ニッポンの新戦略』⑤（観光学オピニオン・シリーズ）NC 出版

鈴木勝 2018『ロシア観光を活発に！』（公明新聞 2018年4月28日号）

服部倫卓 2019『ロシアが外国人観光客の受入に本気を出し始めた』（Asahi Shimbun）